京都府立医大病院のみなさんと

施工前

建てられて三〇年以上経つレントゲン室に入ると怖くて泣き出す子どもがいる。廊下で待たなければいけない親御さんを安心させるためにも子どもにとって楽しい空間に雰囲気を変えて欲しい、それがクライアントである京都府立医大病院からの依頼内容であった。二〇〇九年からホスピタルアートに取り組んできたHAPii+（はぴぃ）プロジェクトは二〇一七年度、十一名の学生によってレントゲン室内と廊下に壁画を制作した。

欧米で端を発し近年日本でも広がりを見せ始めているホスピタルアート。その呼び方もまだ多様な黎明期にあるが、アートやデザインの力で医療現場をより人間的で豊かな空間にしていくという取り組み自体は医療や教育の現場で着実に進み始めている。かつてダ・ヴィンチが人体を解剖しながら絵を描いたように、医療と芸術は本来人間にとって親和性の高い分野であったと言えるかもしれない。近代化が進む中で医療がより科学に身を寄せて進んできたことは必然であるが「人間とは何か？生きるとはどういうことか？」という本来的な問いに答えるにはもう少し多角的な視点が必要ではないだろうか。

施工後しばらくして、廊下で泣いていた子どもがレントゲン室に入ったら泣き止んだという報告を聞き、今回の仕事が成功した安堵とこの分野でのアートやデザインの可能性を実感することが出来た。